

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第36回 第9.6.1節～第9.6.2節

2019年6月15日

小田 勝

「9.6.1 反語」の256頁、用例の(8)と(10)は、むしろ第6.2.6節で言及されるべき用例であった。用例(11)の類例を追加する。

- ・人離れたる所に心とけて寝ぬるものか。(源・夕顔)

「9.6.1.1 やは・かは」の257頁18行目(1つ目の◆の7行目)、初刷・第2刷で「ナサラナイノデスカ」とあったものを、第3刷で「ナサラナイノカ」と改めた。その下の「やはか」の例を追加する。

- ・たとへ番匠が鑿にて打ち候ふとも、やはかたやすくこれ(=為朝ノ矢)ほどは通り候ふべき。(保元・金刀比羅本)

反語の「やは」「かは」の文末の例をあげておく(「やは」「かは」は…)として掲示した用例だから、用例(1)(2)の順序は逆であった)。

- ・水まさり浅き瀬知らずなりぬとも天の門渡る舟もなしやは(後撰228)
- ・声絶えず鳴けや鶯一年にふたびとだに來べき春かは(古今131)

形式名詞「もの」に「かは」が付いて終助詞化した「ものかは」には、反語と詠嘆を表す用法がある。

- ・花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。(徒然137)〈反語〉
- ・「道長が家より帝・后立ち給ふべきものならば、この矢当たれ」と仰せらるるに、同じものを(=同ジ当タルトイッテモ)中心には当たるものかは。(大鏡)〈詠嘆〉
- 「…はものかは」は「…など問題ではない」「…など物の数ではない」の意を表す。
- ・待つ宵に更けゆく鐘の声聞けば飽かぬ別れの鳥はものかは(新古今1191)

258頁用例(12)～(15)の類例を追加する。

- ・天の戸をあけてふことを忌みし間にとばかり待たぬ罪は罪かは(実方集)

258頁「9.6.1.2 めや」では、反語でない(疑問の意の)「めや」の例をあげておく。

- ・[大君ガ] 何せむに我を召すらめや 明らけく我が知ることを 歌人と我を召すらめや…かもかくも命受けむと…参り来て命受くれば(万3886)

第9.6.1.2節の後に、節を追加する。

9.6.1.2' ましや(新設)

文末の「…ましや」「…ましやは」は、実例のほとんどが反語表現である。

- (1) 今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや (古今 63)
- (2) 実^{まこと}の親の御あたりならましかば、おろかには見放ち給ふとも、[源氏ノ許デノ] かくごまの憂きことはあらましやと [玉鬘ハ] 悲しきに (源・胡蝶)
- (3) 露の命消えなましかばかくばかり降る白雪をながめましやは (新古今 1581)

◆次例の「…ましや」は反語ではない。

- ・今宵、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山の端^は逃げて入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。もし海^{うみ}辺にて詠ましかば、「波立ち塞^さへて入れずもあらなむ」とも詠みてましや。(土佐)

259 頁「9.6.1.4 …ばこそ」は、説明の2行を下記に変更する。

反実仮想を表す「…ばこそ…め」 (§ 7.4.5') から転じて、「…ばこそ」で言い切って、「…であるはずがない」の意を表す用法が生じた。中世の語法である。

用例を追加する。

- ・女院、「今は世の世にてもあらばこそ (=今ハ (私ノ) 思イ通りニナル世ノ中デアルハズガナイ) とて、頼もしげもなうぞ仰せける。(平家 7 一門都落)
- ・王藤内「この殿ばらの父をば、まことに討ち給ひけるか」と問ふ。左衛門尉 (= 祐経) 聞きて、「今はかれが聞かばこそ (=聞クハズガナイ (カラ、打チ明ケルガ))。…それがし在京ながら、田舎の郎等どもに申しつけて、かれらが父河津三郎 (= 祐重) といひし者討たせしなり。…」とぞ申しける。(曾我物語)

第 9.6.1.4 節の後に、節を追加する。

9.6.1.5 述語の非表示(新設)

反語を表す「いかがは」の後に、自明な述語が表示されないことがある。

- (1) 「などかく静心なくは歩^{あり}き給ふ」と言へば、[いかがは [歩カザラム]。ほどもなき所に人 (=少将) を据ゑ奉りつれば、人やふと来るとて [不安デ] 騒ぎ歩くぞかし] といらふ。(落窪)

- (2) 「昔ここは見給ひしは覚えさせ給ふや」と問へば、「いかがは [覚エザラム]。
いとたしかに覚えて」(蜻蛉)
- (3) 「伊予介はかしづくや。君と思ふらむな」、「いかがは [カシヅカザラム]。私
の主とこそ思ひて侍るめるを」(源・帚木)
- (4) 「我にはつつむことあらじとなむ思ふ」と [源氏ガ] のたまへば、「いかがは
[ツツミ侍ラム]。みづからの愁へは、かしこくともまづこそは [聞コエサセメ]」
(源・末摘花)
- (5) さしのぞき来るもあり。[ソノ人ニ] 心かけたる人、はた、いかがは [サシノ
ゾキ来ザラム]。(枕 170)
-

「9.6.2 已然形+や」の 260 頁、用例(1)～(6)の類例を追加する。

・いまさらに冬ごもりせる雪なれや山の霞も絶えやしぬらん (能宣集)

261 頁 2 つ目の◆の類例 (「命令形+や」の例) を追加する。

・もろともに影を並ぶる人もあれや月の洩り来る笹の庵いほりに (山家集)

第 9.6.2 節の後に、節を追加する。

9.7 設疑法(新設)

主張を、問答の形式を作って述べることがある。これを「設疑法」という。

- (1) 都には誰をか君は思ひ出づる 都にはみな君を恋ふめり (匡衡集)
- (2) 留め置きて誰をあはれと思ひけむ 子はまさるらむ子はまさりけり (和泉式部
集)
- (3) 奥山にしをるしをりは誰がため 身をかき分けてめる子のため (今物語)
- (4) 「さすらふる身をいづこに」と人間はば「はるけき山のかひに」とを言へ (続
詞花)
- (5) 「都人ありや」と問はば「津の国ののわたりに侘ぶ」と答へよ (公任集)
-

これで「第 9 章 疑問表現」の補遺稿を終え、次回からは第 10 章に入る。